

世界史B（2年） 4/20～24の学習内容①

（1）フランク王国の分裂

前回は、カール大帝が西ヨーロッパをほぼ統一し、西ローマ皇帝の後継者に即位したことを学びました。ところがカールが建てた帝国は、彼の死後30年ほどで分解してしまいます。

カール＝マルテル、ピピン、カール大帝と、ここまでカロリング家は優秀な人物そろいでしたが、この後は平凡な君主しか出てきません。カロリング家という家系のエネルギーを、カール大帝で使いつくしてしまったような、ダメっぶりです。

ゲルマン人は、もともと財産を子どもたちに分けて相続する習慣を持っていましたが、カール大帝の男児で生き残ったのは、長男のルートヴィヒ1世だけでした。

しかし、ルートヴィヒ1世には男児が複数生まれ、彼が死ぬと、そのうち3人が相続をめぐる戦争になったのです。教皇にしてみれば、「せっかく保護者ができたと思ったのに、味方同士で何やってんだ！」と言いたいところでしょう。

4万人が戦死するという大きな犠牲を払った領土争いの結果、3バカ兄弟は均等に領土を分け合うことになりました。

しかし、この後のヨーロッパは、北からヴァイキング、南からイスラーム教徒、東から騎馬遊牧民のマジャール人と、異民族から袋叩き状態にあいます。

教科書のP127上の地図も、一緒に見てみましょう。

長男のロタールには、**中部フランク**と**北イタリア**を。

弟のルートヴィヒ2世には、**東フランク**を。

弟のシャルル禿頭王には、**西フランク**を。

この時に結ばれた条約を、「ヴェルダン条約」と呼びます。

ところが、これで終わりではありませんでした。

長男のロタールが死んで幼い子が後を継ぐと、弟たちがハイエナのように襲い掛かって、中部フランクを分け合ってしまった。この時に結んだ条約は、「メルセン条約」と呼びます。

もう一度、教科書P127の地図を見てみましょう。この条約によって、最終的にフランク王国は、「西フランク王国」「東フランク王国」「イタリア」の3つに分裂しました。

西フランクと東フランクが、それぞれ今のどの国のルーツに当たるか、わかりますか？

そう、西フランクは「フランス」、東フランクは「ドイツ」です。そして「イタリア」。西ヨーロッパを代表する3つの国が、この時期に登場するのです。

この次は、西フランクと東フランクが、それぞれどのようにしてフランスやドイツになっていったかを、見ていきましょう。

(2) 西フランク

西フランク王国では、987年にカール大帝の血を引く王家が断絶しました。

西フランクの貴族たちは話し合いで国王を選ぶことにしましたが、その時に選ばれたのは、パリ伯のユーグ＝カペーでした。

彼が選ばれたのは、強かったからじゃないんです。パリは当時、貧しい地方都市で、彼の領土はごく小さなものでした。

貴族たちは、自分が自由に行動できるように、あえて弱い貴族を国王にしたんです。もちろん、王の言うことを聞く気はありません。

右がユーグ＝カペーの肖像です。マントのようなものを身に着けていますね。聖職者が着るケープ (cape) で、これをいつも着ていたためにいつしか家名になったんだそうです。



ケープはフランス語でカペー、ポルトガル語でカーパ、すなわち日本の雨がっぱです。

つまり、彼の名前は「かっぱのユーグ」。実力も名前も、実に冴えない国王の誕生でした。

彼の即位以降、この国を「カペー朝」と呼びます。フランクはこの地の方言で訛って、やがて「フランス」と呼ばれるようになります。カペー朝フランスの誕生です。

彼を国王に選んだ貴族たちは、まさかこの王朝が長続きするとは思わなかったでしょう。しかし、この王家は次第に力を拡大していき、途中で王朝の名前は変わりますが、ルイ 16 世まで実に 800 年以上にわたって続いていくこととなります。

(3) 東フランク

東フランクの展開は、西フランクよりも少し複雑です。この国は西フランクより早く、911年にカロリング家の血筋の王家が断絶しました。

実はこのころ、西ヨーロッパ全体にスカンディナヴィア半島から「ヴァイキング」(ノルマン人)という集団が侵入し、大ピンチになっていたのですが、彼らについては次回の解説で説明します。

東フランクはそれに加えて、東方から騎馬遊牧民の侵入を受けていたため、北と東から挟み撃ちにされていました。他国以上の、「大大大ピンチ」という状態になっていたのです。

この遊牧民は、「マジャール」と呼びます。カール大帝に敗れたアヴァールに似て、中央アジアからヨーロッパに侵入し、パノニア（現ハンガリー）に拠点を築きました。

資料集P1401の地図を見てみてください。マジャールの侵入が茶色の矢印で示されています。

そんな東フランクでは、西のかっぱ男のような小物を国王にしている余裕はありません。国王の座に就いたのは、強力な貴族のザクセン公ハインリヒでした。ザクセン朝と呼びます。

かつてカール大帝に屈服したザクセン人が、自らの手に王位を取り戻したんです。国王がフランク人ではなくザクセン人なので、もう「東フランク王国」と呼ぶ必要はありません。

「ザクセン朝ドイツ」の誕生です。

ハインリヒの子でドイツ王となったオットー1世は、きわめて才能豊かな人物でした。反抗的だった他のドイツ貴族をまとめ、レヒフェルトの戦いでマジャールとの決戦に勝利します。

このあと、マジャール人はパンノニアに定着し、ローマ=カトリックを受け入れて、ヨーロッパ社会の一員となります。これが、ハンガリーの起源です。

オットー1世がマジャールを破り、一躍キリスト教世界の英雄となっていた時、彼に熱い関心を寄せていた人物がいました。ローマの教皇です（こればっか・・・）。

当時の教皇はフランク王国という守護者を失い、さらに不道德な行いが聖職者に目立つようになったことで、影響力は底辺に落ちていました。

当時の教皇ヨハネス12世は、歴代教皇の中でもワースト1に選ぶ歴史学者もいるゲス教皇（死因は「不倫相手の夫から殴り殺された」説あり）でしたが、オットー1世を保護者とすべく、最終兵器ともいえる手段を取ります。

そう、あれですよ。教皇の必殺技と言えば・・・

ローマ皇帝の帝冠授与です。

保護者を求める教皇によってオットー1世は、「ドイツ王」に加えて、「ローマ皇帝」を名乗ることになりました。この帝国は、古代のローマ帝国と区別するため、「神聖ローマ帝国」と呼びます。

ここで、一つ大事なポイントがあります。注意してくださいね。

この国は「神聖ローマ帝国」という名前ですが、領土から見れば、「ただのドイツ」なんです。古代ローマ帝国のような、大帝国ではなかった、という点に、気をつけてください。

資料集のP145Aの地図一番わかりやすいと思うのですが、どうですか？今のドイツより大きいとはいえ、古代のローマ帝国（資料集P73）とは、比べるまでもありません。

しかも、「ローマ皇帝」という名前を背負ってしまったがゆえに、これ以降のドイツ王は、壮大な目標を背負ってしまいます。それは「まずローマ市のあるイタリアを征服し、そののちに全キリスト教徒の王として、ヨーロッパ全土を統一する」という夢です。

この後、歴代の皇帝は、イタリアの占領をめざして遠征を繰り返すこととなります（「イタリア政策」と呼びます）。

イタリア政策のために、本国ドイツの支配はおざなりとなってしまう、その結果貴族たちは、皇帝への反抗と自立を強めていきます。さながらドイツは、学級崩壊のような状態になってしまうのです。

（4）イタリア

弟たちによってぼこぼこにされてしまったロタールの国、イタリアですが、この国は最も早い875年に、カロリング家の王家が断絶しました。まるで呪われているかのようなツイテなさです。

その後、イタリアは統一されることなく、様々な勢力によるバトルロイヤルのリングと化してしまいました。北からは神聖ローマ帝国、南からはイスラーム勢力、東からはビザンツ帝国などが、「ローマ」の名にひかれて、軍勢を送ってきます。

そんな中で、ローマでは教皇領がしぶとく生き残ります。一時は勢力を失ったローマ教会ですが、やがて教会の改革を進めて、聖職者の道徳性を回復することで再び信頼を取り戻し、ヨーロッパ最大の権威へと復権を果たしていくことになります。

その他、北イタリアでは、ヴェネツィアやジェノヴァ、フィレンツェといった都市が、小国として事実上の独立を達成していくことになります。

イタリアは小国の集合体となってしまう、今の形のような「イタリア」という国の成立は、実に19世紀を待たなければなりません。